親鸞における「時と永遠」

武　田　未来雄

親鸞の開顕した浄土真宗の仏道は、常に現在の時を中心としていたと考えられる。その事は、本願成就文の親鸞における了解から伺うことが出来るのではないか。親鸞は、本願成就文にある「乃至一念」を信の一念とし、それを信一念の「時」と決定している（『教行信証』・信巻）。この信一念の時こそが、親鸞が常に立った現在の時である。

真實信心をうれば、すなわち无碍光佛の御こゝろのうちに攝取して、すてたまはざるなり。「攝」は、おさめたまふ、「取」はむかへとるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき・日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。

（『定親全』三・和文篇・一二七～八頁）

と、『一念多念文意』に、信心を得ることは弥陀の摂取不捨におさめられることであり、その時に正定聚の位に住し、往生を得ることであると、願成就の信の一念を得ることについて述べられている。信一念の時とは、そのような具体的な救済の内実があると、伺うことが出来る。正定聚の位に住するとは、必至滅度という不退転に住することである。つまり、この信一念の現在の時とは、必ず滅度に至るという確信のある現在であると言えよう。このように親鸞が立った信一念の現在とは、本願の用きに乗託して得る現在の安住であるのである。

信の一念とは、煩悩具足の凡夫を正機としてはたらく本願を自覚し、正しく本願成就の「今」という時に立つことを意味する。その成就について、

爾れば、若しは行、若しは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまう所に非ることあることなし。

（『定親全』一・一一五頁）

と、成就とは「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したもう所」であると述べられている。これは、本願成就の信一念の時とは時を超えた如来の願心が具体的な時間において発起することを意味しているのではないだろうか。我々は、時に執着し時に流され、そのような時において生死している。信の一念とは、その中で現在安住の「今」という時を得ることである。そのような「今」を獲得するには、時を超えた永遠なるはたらきの自覚を必要とする。それは、過去・未来・現在という三世を超えたはたらきを、常に過去・未来・現在という時間において自覚することである。回向成就とは、時を超えた永遠なるはたらきが、時間の中に発起し、その永遠なるはたらきが自覚され、正しく信の一念として開発することを意味しているのではないだろうか。親鸞の思想において「回向成就」とは、信心の「発起」と言われ、また「開発」という言葉で表されたりする。それらは現在の時に発起する、ということを表しているのではないか。「時と永遠」という課題から、その事について考えてみようと思う。

この事は、信巻には「三一問答」が展開されているが、そこから伺うことが出来る。三一問答は、第一問答と第二問答とがあり、特に第二問答は、阿弥陀如来が愚悪の衆生のために本願三心の誓いを起こされたことを如何に了解すればよいか、と問われており、

以下本願の三心について表されている。その至心釈では次のように述べられている。

仏意惻り難し。然りと雖も、竊かに斯の心を推するに、一切の群生海無始より已来た乃至今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。

（『定親全』一・一一六～七頁）

と、三心釈は「竊に斯の心を推するに」という言葉から始まる。曽我量深は、「斯の心」とは真実信心を示すと解釈している（『選集五巻』一七二頁）。つまり、それは自己に発起した信の一念である。三心釈は、信一念の時に立って、その信心を推求して展開されている。そこから、一切群生海は無始已来に穢悪汚染・虚仮諂偽であると述べられ、

是を以て如来一切苦悩の衆生海を悲愍して不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来清浄の真心を以て円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心を以て諸有の一切煩悩悪業邪智の群生海に回施したまえり。則ち是れ利他の真心を彰す。（同上）

と、如来の不可思議兆載永劫の修行が表されている。これは、一切の衆生が無清浄心・無真実心であるが故に、だからこそ如来は不可思議兆載永劫の修行を行じ、真実心を成就して、衆生に回施された。親鸞は、信一念の時の獲得の背景には、時を超えた如来の永遠なる用きがあると見ているのではないか。この至心釈には『涅槃経』の文が引用されている。

既に真実と言えり。真実と言うは『涅槃経』に言わく、「実諦は一道清浄にして二有ることなきなり。真実と言うは即ち是れ如来なり如来は即ち是れ真実なり。

（『定親全』一・一一九頁）

と、『涅槃経』の文には真実とは即ち如来であると説かれている。至心釈では、如来は真実心を成就し一切苦悩の衆生に回施されたことが述べられていた。この『涅槃経』の文は、如来が菩薩行を行じた結果のみを真実というのではなく、真実とは如来のはたらきそのものであることを指し示しているのである。このような『涅槃経』の引用によって如来の在り方を表すことは、真仏土巻にも引用されて示されている。それらの引用文から、如来は過去・未来・現在の時を超えた常住不変であると、伺うことが出来る（四相品の文〈『定親全』一・一二三頁〉迦葉品の文〈『定親全』一・二三九頁〉）。また、そのような常住不変の如来は、菩薩として衆生に積極的にはたらく在り方が説かれていた（梵行品の文〈『定親全』一・二三五頁〉）。親鸞は、『涅槃経』のこのような如来の在り方を、「真実即是如来、如来即是真実」と、見たのである。それは、真実信心とは常住不変の如来のはたらきの自覚であることを意味するのである。従って「信の一念」には、永遠なるはたらきの自覚があると言えよう。

このように親鸞が表した「回向成就」について、「時と永遠」という視点から見ていくことが出来るのではないか。その「永遠」とは時を超えたはたらきであり、「時」とは、正しく執着し時に流されている中にあって、成就するいま現在の時を示す。それによって、正しく親鸞は常に信一念の時に立ち、真実の救済は、現在の安住として、現在の今において自証されることが明らかになるのである。